

太祖常濟大師の温い家風

神 保 如 天

一。山林獨居を斥けらる

太祖常濟大師は一般に謂はるゝ高僧碩徳とは餘程其の趣きを異にする點が多いやうに思ふ。大師の性格は極めて明るく且朗かであつた。物に屈托するところい無い、のんびりとした心の所有者であつたに相違ない。それであるから悲觀的な厭世的の氣分は毫も有つてゐられなかつたやうである。それが大師の家風として、一生の行實の上に如實にあらはれてゐる。其の一つとして先づ第一に擧げ度いことは、大師は山林に隱居することを極力排斥せられた。それは傳光録の龍樹章に次の如き語がある。

昔の比丘の如く、寂靜をねがひ、山林に隱居することなかれと。又云く

猶諸人と肩をまじへ、參來參去すること、閑靜ならざる故に、獨り山林に居して、靜かに坐禪行道せんと、かくの如く

いひて多く、山谷に隠居しみだりに修練する類、多くはもて邪路に趣き來る。ゆゑいかんとなれば、其の眞實を知らず、自己を先とするゆゑなり

と。いたく山林獨居を斥けられてある。更に語をついで、

徒に參すべきを參せず、至るべきに至らず、山谷に居して獼猴の如くならん、もつともこれ無道心の甚しきなり。

といひて、山林獨居の無道心なるを痛撃し、最後に

獨住閑居を好樂せず、ただ道業を精進し、専ら法源を透脱すべし、是れまさに如來の眞口訣なり。

と結んである。これに由つて觀れば、大師は只管獨住閑居を排し、叢林修道を勸奨せられた。それ故に大師の一生を大通じて山谷に獨居せられた跡方は見當らない。これ大師の家風の一つ。

二。伽藍の造營。名利敢て辭せず

第二には伽藍の修築に大なる關心を有たれてあつたことを擧げ度い。その事實は永光寺、總持寺の大伽藍を建立せられた事實、文書等に依つて明かである、其の他、城滿寺、淨住寺、光孝寺、寶應寺、放生寺、圓通院等の建設、大乘寺の經營を加へて一代に九箇寺の造營を成されたことは、如何に殿堂伽藍に多大の關心を有せられたかを窺ふことが出来る、何の爲に伽藍の必要を感じられたかといふに、一は傳道弘教の爲であり一は行法儀式の爲であり一は辨道修行の爲

であつたに違ひない。それには必ず大道場、大伽藍を要せられたのである。伽藍佛法必ずしも非議すべきではない。これを有意義に用うれば伽藍ほど大切にして重要なものはない。

第三には大師は自から名利に恬淡とししおひになつたけれども、名も利も施す者あらば決して之を退けず、寧ろ之を受くるに躊躇せられなかつたことを擧げ度い。大師とても殊更に名聞を求められるやうなことは決して無かつたけれども又強いて之を拒否するやうな態度は毫もなかつた。永光寺然り、總持寺然り、奏對然り、綸旨然り、勅額然り、施すものは之を受け、與へられるものは頂戴するといふ、極めてあつさりした態度である。而して其れ等には置文あり、又龜鑑を遺して、「予が嗣法の門人、連續して住持興行すべし」と定められた。若し當時の事狀が許すならば、大師は京師の中央に大伽藍を建立し、勅願所として紫衣法服を着けて、上皇室に奉じ、下萬民を教化せられたであらうと思ふ。能登の總持寺が大師六百年後、明治年間に至つて帝都に近く、鶴見に大本山總持寺を移轉し、輪奐宏莊の大伽藍を修築したといふことは強ち偶然の出來事では無いやうに思はれる。

三。國恩に報ずるの至誠

大師に就いて特に深く感ぜられることは、恩義に酬ゆる精神、感謝の念の極めて篤いことである。國恩に報ずる至誠、父母に對する恩義を述べて傳光錄羅聯羅章に次の如くいつてある。

汝諸人、悉く皆國土にはらまる、一天下、國土上、悉く是れ國王の水土にあらずといふことなし。然るに家であれば親に仕へ、國に侍れば君につかふまつる、如し是なる時天地加護ありて自から陰陽のめぐみをうく。然もなまじひに佛法をねがはんと號して、可し仕親にも仕へず、つかふまつるべき君にもつかふまつらず、なにをもてか父母生成の恩に報じ、なにもてか國王水土の恩を報ぜんや。道に入りて道眼なからん、恰かも國賊といひつべし。

と。出家したる者が往々にして、家をすて國を棄てたる身なれば、父母や國王の恩を報ずるに及ばぬものゝ如く思惟する輩に對して頂門の一針を與へて、斯る輩は道に入りて道眼なきが故に國賊なりと罵倒せられたのである。これに由つて大師が如何に國恩を感じ、父母の恩を感じてゐられたか知られる。今其の事實の二三を左に掲げる。總持寺開山十箇條之龜鑑の第一に云く

當寺者依_レ無_二檀越_一以_二托鉢_一欲_二勤_二住持_一。然依_二皇情_一爲_二勅願所_一。故予嗣法門人、盡未來際以_二當山_一爲_二本寺_一、勤_二輪次之住持_一、可_レ奉_レ祈_二寶祚長久_一事。

と定められたるが如き、又瑩山清規の年中行事正月三朝の疏に云く

今遇_二三朝佳節_一、恭奉_二爲_二祝_二延_二聖壽_一。三箇日際率_二現前大衆_一、就_二覺皇寶殿最勝殿上_一、諷_二誦當

途王經三卷_一、以_二修正滿散者_一。

と。特に此の際大衆に警告して云く

祝聖修正者、天下叢林之一大事也。一衆必可_二出仕_一。若如_レ無_二出仕_一、維那以_二行者_一可_二催集_一。

とあるを觀て、如何に之を重大事視せられたか、伺はれる。其の他、朔望祝聖、聖壽牌奉安、念誦諷經等々、苟も儀式法要のある毎に、皇圖鞏固、國土安寧を祈念せれざるは無かつた。今一一此に枚舉するに勝へないから略しておく。

四。父母肉親に對する孝情

次に父母等の肉親に對して深く感恩の念に住せられた一二の事例を舉げて見よう。大師の嚴父の姓氏は判明してゐないが、入道の後の名を了閑上座と稱せられてある。山僧遺跡寺寺置文記に之を觀るに、圓通院は祖母明智、寶應寺は悲母懷觀、淨住寺は嚴父了閑の爲に建立せられたものなることが明かである。文に云く

一。山中圓通院者、爲瑩山今生祖母。明智優婆夷之所建立也。依幼稚養育之恩深而立一院。安觀音爲本願主本檀那祖忍大姉、永年偃息之道場處。云々

一。加州寶應寺者、爲瑩山今生悲母、懷觀大姉之所建立尼寺也。明照姉公、依爲彼姪補最初房主。云々

一。加州淨住寺者、本願素意、清淨寄進之僧所間、任素意爲了閑上座、令修練勤行。如今無涯老門徒相承。而可令住持興行。是本願并開闢懷觀大姉、并紹瑾。加州第二之遺跡也。素意勿令失。

これを以て此の三刹が、祖母及び兩親の爲に建立せられ、而して現當二世の利益を施し、父母生々の恩に酬ひられたものである。了閑上座には瑩山今生の嚴父とは記してないが、母の懷觀大姉と大師とが本願主となり開闢となつて無涯門徒をして住持與行せしめられたことに依て、嚴父了閑上座たることは自から明瞭である。悲母懷觀大姉は文保二年八十七歳を以て永眠せられたから、大師は時に五十一歳で已に永光寺開創に著手後のことである。故に大師は母の晩年を淨住寺に親しく省觀せられたことであらうと思ふ。圓通院縁起に依て觀ると、大師懷孕の時から出生、成長、出家後、子の爲に祈りに祈られた。如何にも母性愛の眞剣さがあらはれてゐる。大師も亦此の熱烈なる母性愛の懷ろに抱かれて御生長になつたのであるから、母に對する孝養親情も亦一入深かつた。大師が豊かな温かい明朗な性情を有せられるのは、思ふに此の慈愛深き母性の懷にお育ちになつた賜ものではあるまいかと。祖母の明智優婆夷は幼稚養育の恩深きが故に一院を立つと、蓋し祖母に受けられた感化も甚だ深いものがあつたのであらう。洞谷記に

法名祖忍、抑彼平氏女者。永平和尙、建仁寺御座時、御弟子明智優婆夷再來也。予與女如_レ

磁鐵_二不相離_一、師檀師弟也。

とあるを以て觀れば、祖母明智は永平高祖に建仁寺で受戒の弟子であつて、今默譜祖忍尼は其の再來である。故に磁鐵の如く相離れず、それで祖忍尼をして圓通院に永年偃息せしめ、祖母の恩を報ずると共に本願主本檀那の功勞に酬ひられた。其の温情の濃かなる實に感歎に堪へざるものがある。

五。檀越信施に對する感謝の念

次に最も注目すべきことは、檀越信施に對する感謝の念の極めて旺盛であつたことである。誰しも信施に對して相當感謝の念を有つてはあらうが、其れを永久に子孫に傳へて檀越を供養せしむるといふに至つては、恐らく大師以外に餘り多くの例を見出し難いであらう。當山（洞谷山）盡未來際置文に云く

佛言、篤信檀那得之時、佛法不斷絶、云々。又云、敬檀那可如佛、戒定慧解、皆依檀

那力成就、云々。然間、瑩山今生佛法修行依檀信心成就。故盡未來際、以此本願主子子孫

孫、可爲當山大檀越、大恩所是故、師檀和合而親作水魚昵。來際一如而可致骨肉思。用

心如此者、實是可爲當山之師檀。云々

これに由て能く大師の心事を察することが出来る。一二の事例を擧ぐれば、總持寺は元眞言の律院で諸嶽寺といつたのを時の院主定賢律師が、靈夢を感じ且大師の高徳を慕うて、擧げて之を寄進したところの大檀越である。故に十箇條之龜鏡の第三に

一當寺者元是雖爲敎院、依定賢律師之請、革敎作禪。故以定賢律師爲開基可獻香

華一事。

と定められ、即ち永世供養すべきことを掟せられたのである。永光寺は海野三郎滋野信直(受戒して妙淨)及び夫人(受戒して默譜祖忍尼)の信施に基く。これは既に掲げた盡未來際置文や、圓通院を以て本願主本檀那祖忍大師の永年偃息行道之道場處と爲すといはれた語に依て能く其の感恩の念の如何に深いかを證することが出来る。その他、洞谷山條條盡未來際可勤行一事の一一は皆是れ施主に對する永世の謝恩に外ならないのである。瑩山清規の月分の三日十七日に檀那諷經を制せられ、三念誦に十方施主、増福増慧を念するもの、皆此の精神に出でたるものなることが知られて誠に尊く感ぜられる。

六。祖師に對する敬重の念

傳燈の祖師に對する尊崇敬重の念の特に深切であつたことも、大師の家風の顯著なる事實の一として數へられる。大師の傳光錄の釋迦牟尼佛以下、五十二祖懷昇禪師に至る五十三章の提唱は一面から觀れば、西天東土本朝の佛祖讚仰の歸敬文であると云つてもよからうと思ふ。洞谷記に據れば

予洞山高祖十六世之法孫、故慕_二彼家風_一。山名爲_二洞谷_一。改_レ山爲_レ谷、轉_二曹谿_一如_レ爲_二曹山_一。爲_二

大陽高祖十一代法孫、故慕_二大陽盈目_一、號_二永光寺_一。

即ち洞谷山永光寺の名稱の由來は、洞山高祖と大陽高祖の家風を慕古するに起因することが明かである。而して當山盡

未來際置文に

能州、酒井保、洞谷山者、平氏酒勾八郎頼親嫡女、法名祖忍、清淨寄進之淨處。故紹瑾、爲一生
生偃息之安樂地。來際爲瑩山遺身安置之塔頭所。是以、自身嗣書、先師嗣書、師翁血經、曾
祖靈骨、高祖語錄、安置當山之奥頭、而名此峰稱五老峰。然者、當山之住持者、五老之
塔主也。云々

とある。即ち高祖天童如淨禪師、曾祖永平開山道元禪師、祖翁永平二世懷辨禪師、先師大乘寺開山義介禪師の四祖と大
師自身とを一塔頭に收め之を五老峰と爲す、實に是れ師資血脈不斷、連綿相續の親切を極めたるものといふべきである。
この事は、大師の洞谷傳燈院五老悟則并行業略記に詳しく記せられるところであるが今は省略しておく。永平高祖に對
しては特に崇敬の意を拂はれてゐる。傳光錄に

淨和尚をとぶらひて一生の事を辨じ、本國にかへり正法を弘通す。實にこれ國の運なり。人のさひはいなり、あだか
も西天二十八祖達磨大師はじめて唐土にいるがごとし。これ唐土の初祖とす、師またかくのごとし。大宋國五十一祖
なりといへども、今は日本の元祖なり。ゆへに師はこの門下の初祖と稱したてまつる。

又祖翁懷辨、先禪義介兩禪師を讚歎して

實に開山の法道を傳持して永平に弘通すること、開山の來記にたがはざるゆへに、兒孫いまにおよびて宗風未斷絶。
これによりて當寺老和尚价公、まのあたりかの嫡子として法幢をこのとこにたて、宗風を當林にあぐ。因て雲兄水

弟、飢寒をしのび古風を學び、萬難をかへりみず、晝夜參徹す。これ然しながら師の徳風のこり、靈骨あたたかなるゆへなり。夫れ法をもんずること師の操行のごとく、徳をひろむること師の眞風のごとくならば、扶桑國中に宗風いたらざるところなく、天下徧ねく永平の宗風になびかん。

といつてある。大師は大乗寺に在つて本師徹通禪師の教化を補佐せられること正安元年より延慶二年介祖入滅まで、前後十一年全く自己を忘れて先師に孝養を盡されたことは傳記の上に明かなることである。本師及び上佛祖に對 報恩奉重の念の切實であつたことは大凡そ之を以て知られる。

七。嗣子撫育の親情

大師は上佛祖に對して報恩の念が深かつたばかりでなく、下子孫門人に對しても極めて親切であり慈育の愛情が甚だ厚かつた。元亨元年正月廿八日に鐵鏡眼可が遷化した。それを洞谷記に記して云く

可鐵鏡遷化、予最初五人、得戒之上足。如釋尊在世陳如尊者。城萬寺最初首座也。先師圓寂

時初任首座。加州淨住寺西堂也。仍於當山二分半座。當山盡未來際可敬重首座也。

この語を聞いては逝ける可鐵鏡が地下に瞑するばかりでなく其の輪下に在る者、亦大師の爲に不惜身命の感激を有つたであらう。峨山禪師を總持寺に請する疏に云く

南閻浮提大日本國能州櫛比莊諸嶽山總持寺住持紹瑾。

今月七日請_二

當首座峨山禪師。讓_二與住持職。紹_二續轉法輪_一者。

右峨山老者。予三十年同宿。公三八年開悟。揚眉瞬目中。知_レ有_二己眼。破顏微笑處。事辨_二主宰。草露菓熟。不_レ許_二韜光晦迹。宗風一興。難_レ藏_二祖師命脉。人天推請。初轉法輪。新命堂頭和尚容納陞座。瑾 疏。

元亨四年甲子七月七日 住持 紹瑾 狀請

又明峰禪師に洞谷讓與御狀には

附_二與洞谷全座於素哲首座。明峰兄老_一。

靈山一會座猶暖。 附_二與明峯永興繁。

洞谷綠松綠彌奧。 雲居懸記水泓灣。

正中二年仲秋初八日 洞谷讓附 紹瑾 判

とある。是れ等の文を拜誦するに其の叩嚙親切、實に讀む者をして襟を正さしむると共に、羨しいほどの人情美が發揮されてゐる。明峰、峨山、無涯、壺庵の四哲、其の門下雲の如く門葉天下に充ち、終に一萬四千の大をなすに至つたのは、蓋し流れ長きは源の深きに由るものといはなくてはならぬ。

八。同參恭翁運良を大乘寺に請す

最後に大師は極めて友情に富んでゐられたといふ一事を掲げて置き度い。それは由良の法燈國師の弟子である恭翁運良和尚を請して大乘寺の住持たらしめたことである。大師は十八歳より諸國に遊方して幾多の知識に參尋せられたが、其の間に紀州由良の興國寺に遊び、法燈國師心地覺心に參ぜられたことがある。法燈國師は始め深草に道元禪師に就いて大乘菩薩戒を受け、後に宋に遊び揚岐下八世無門慧開の法を嗣いで歸り、由良に禪法を舉揚してゐたのである。其の門下に三光國師孤峰覺明、恭翁運良等があつて、大師と同學同參の間柄であつたであらう。孤峰覺明は出雲宇賀に雲樹寺を開いて其の祖となり、元享二年勅使として總持寺に十種の勅問を奉持して來た人である。斯ふした種々の深い關係があつて、同參の誼ある恭翁運良を一代限りに大乘寺に請して住持せしめられたのは、一は法燈國師に對する報恩と、一は友人に對する道誼とに依つて然らしめたのであらう。延寶傳燈錄の恭翁の傳に云く

加州大乘缺_レ主、瑩山和尚招_レ師住持。付以_三自筆碧巖集、櫻欄拂子、應量器_一。衆中有_二嫉_レ之者。觸以_三違境_一。師性急率持_レ錫勇退寓_二白山下眞光寺_一。(中略)覺圓居士建_二傳燈寺_一。延_レ師爲_二

開山始祖_一。

これに由つて明かである。後に加州瑞應山傳燈寺開山となり佛林慧日禪師の勅號を賜はり曆應二年に勅願所となつた。大

乗寺は其の後明峰素哲禪師が席を董され、それより連綿として明峰派で相繼ぐに至つた。

以上、何等の用意も無く思ひ出るがまゝに、大師の家風、特に情味の豊かなる方面を取立て、列擧したのである。吾人は禪僧といふタイプに一種の固定した概念を有つてゐる。その概念で常濟大師を觀ると何だかスツカリ變つてゐるやうに見えるかも知れぬ。然し大師の如きタイプが本當の禪僧なのではあるまいか。斯うした人間味の豊かな、洗練された宗教的情操を以て實生活の世界に、温かい而も朗かな、のんびりとして何等のこだわりが無い、大師の如き禪僧の出現を待望する。これが實踐宗乘の眞意義ではあるまいかと思ふ。太祖の此の明朗な家風を一つ參究して、行詰つた世界を大いに打開しようではないか。

(二五九四、一一、一一一)